
銀ぶり

灰汁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀ぶり

【Nコード】

N5541H

【作者名】

灰汁

【あらすじ】

「ここどこだ？…なーんてベタすぎるだろ俺」見知らぬ風景、見知らぬ人々、見知らぬ歌舞伎町の面子並みに濃い連中、おまけに変な化け物まで出てきちゃったら、流石の銀さんも混乱するしかないんだよ！要するにクロスオーバーってなもんさ

「01:はじめましては」

いやいやいや。夢だろ、夢。

『キシヤアアアア！』

『ゲギヤギヤギヤ！』

天人、にしては…いやいやいやいや。

目を覚ませ銀時、これは夢だ。

…よく見てみる銀時。あいつなんか昨日声かけた後ろ姿は美人だが顔がアレなホステスとそっくりじゃねーか。

振り向いた瞬間驚いて吹っ飛ばしちまったが、俺は悪くないはず。

だってあれ詐欺だもの。まんまと騙されたもの。

きつとアレだ。あまりにも迫力あるアレな顔だったから、悪夢になっ
て出てきたんだ。きつとそうだ。

あ、なんかこっち見た。

め、目を覚ませ銀時！起きたらきつと結野アナが笑顔で俺の運勢を
占ってくれるはずだ！

あ、なんかこっち来た。

いいいいいい加減にしろ銀時イイイイ！

早く起きないとアレだぞ！あの、アレの刑だぞ！

あゝあゝあゝ、なんか走ってきたアアアア！

「ギヤアアア！こつち来んじゃねエエエ！」

『ギヤギヤギヤ！』

『ウホッウホッ』

『フシユル―ハフシユル―』

「なんなんだこいつらアアア！？なんでこんな擬音が生々しいんだよ！いらねえんだよそんなリアルティ！いいから俺をリアル（現実）に戻してくれ神様アアア！」

しかし謎の生き物たちは遠慮という言葉もなくひたすら攻撃してくる。

逃げるが勝ちだ。

しかし夢にしては少しかりリアルすぎねーか…？

冗談じゃない、大体何処なんだここは！

歌舞伎町の近くにこんな広い森なんかねーはずなんだが…。

てかこれ木か？真っ白に燃え尽きたジョーのように白い。

…ん？なんだこの黒い服。こんな服持ってた覚えねーんだけど。いつ着替えたんだ？

というかなんで真剣？

こんな刀持ってた覚えねーんだけど。木刀はどこに…

「っ！」

迫る鋭い爪に反射的に刀を掲げると金属の音が響いた。

殺る気満々ですか。しょうがねえ、

「やるしかねえってかつ！」

なぜか持っていた刀を抜き、10匹ほどいた変な生き物に向かって突っ込んでいく。

――？

なんだこの刀…こんな振るやすい刀初めてだ。まるで自分の腕みてーに

『ケケケケケッ』

「うおっと！…たくよ、考えさせてもくんねーのかよ。これアッ、さっさと片付けるしかねーか！」

取り敢えずは目の前の敵に集中しなけりや喰い殺されちまいそうだ。

しかしさっきから背中がぞわぞわする。久々に刀使うからか？
にやりとしながら最後の敵を斬り伏せたが、どうにも自嘲的な笑み

になっちゃった。

「はあ…腕が鈍ったかもな。にしてもここはどこだっつー話だよな…
って、あら？さっきの死体が消えてる…？やっぱ天人じゃなかったのか？」

「興味深いね。どこから迷い込んで来たんだい？死神」

ぞわっ

「——ッ!？」

この感覚は、

「…ちよーつと廁を借りたくてね、兄イさん場所判るかい？ついでにこの森の出口も教えて貰えたら助かるんだけどよ」

背後に突然現れた男を振り返り見据える。

白い羽織を着た、オールバックの優しげな笑みを浮かべた男。

だがね、目が笑ってないよオニーサン

「それは困ったね、残念だがここにはないんだよ。」

「…そいつア残念。ここはアンタの所有地かなんかかい？わりいことしたな、すぐ出てくからよ」

「気にする事はない、ゆっくりしていくといいよ。少し話も聞きたいところだからね」

厄介そうなのに捕まったな…。

「残念だが俺の膀胱は待っちゃくれねーみてえだからよ、話はまた今度だ。だが…出口までは案内して貰おうか？」

男の首元に刀を突き付ける。退かないなら力付くで行くしかねえ。しかし男は微動だにせず、銀時へ微笑みかけた。

「…フツ、面白い男だね。君はどうやら死神になったばかりのようだね。始解にも至ってはいないようだし」

ぞわっ

まただ。

この感覚さつき闘ってる時に感じた…、アレはこいつの気配だったのか。

それにこいつ、全然動じねえ。

あまり関わりたくない。さっさと出るか。

「取り敢えず俺の膀胱が破裂する前にこっから出してくれや。でねーと」

「斬る、つて？」

「っ!？」

目の前で刀を突き付けられていた男は、一瞬後、俺の後ろに立っていた。

そして首元には、切っ先。

おいおい、瞬間移動かよ。

「ほう？ 霊庄はあの旅禍の少年と並ぶ程か。だが、あの少年よりも鋭い。まるで刃のような霊庄だね」

先程から分からない単語ばかり出てきて、銀時は少し混乱していた。だがこのままにいるわけにもいかない。

しかし隙がまるでねえ。不味いな、勝てる気がしねえ。

それも本気出してねえだろ。力量は未知数ってか。

それにもし切り抜けたとしても、ここがどこだかも分からねえんじや下手に動けねえ。

どうする、

『なら俺を使え』

「へ？」

「？」

考え込んだと思ったら、今度はすつとんきような声を出した俺に男は怪訝な顔をする。

しかしそれどころじゃなく、また厄介なものが来たのではないかと気が気でない。

ここは知らない場所だ、俺の知り合いでこんな気味の悪い樹海みたいなところにくるなんざ長谷川さんくらいしか思い付かない。あの人はいつ自殺してもおかしくない人生送ってるからな。

俺の知人でないとしたらこの男の仲間とも限らない。

だが、男には今の声は聞こえていなかったらしい。

誰だ…？

『俺だよ俺、
だよ。わかるだろ？』

横目で男を伺う。

…聞こえてない。

試しに心の中で呟く。

（名前聞こえねーよ。オレオレ詐欺か？古いんだよコノヤロー！）

『おいおい冗談だろ、聞こえねーはずねーだろ！俺はお前なんだぜ！？』

なんてこった、脳内会話成立しちゃった。

俺の頭はとうとうおかしくなっちゃったのか？

てかお前が俺ってどういうこと！？

二重人格か？ドッペルゲンガーかコノヤロー！

「変な声を出したと思ったら、今度は百面相かい？…まあいい、君は殺すには少々惜しいが、芽は若いうちに摘むべきだろうからね」

「！」

はっとし男を振り向けば、すでに刀は俺の首に当てられ、横に滑らせればゴトリといくだろう。

やべ、死んだなこれ

——あれ？

なんだ、なんなんだよオイ。

いきなり森のなかでした、と思ったら、今度はいきなり戦場かよ…。

でもなんだ？なんか落ち着く。…どうかしてるぜ、戦場で落ち着く、

なんて

『でも昔はそれが普通だったじゃねーか』

！……お、れ？

『ああ、お前だぜ？言っただろうが。俺はお前だつてよ』

お前、さっきの声のやつか。つーかオメーのせいで俺ア変人扱いされ
『力が欲しいか？』

……あ？

『お前、今のままじゃあのままあの男に殺されんぞ？』

あ、俺まだ死んでなかったんだ。

『そう簡単に死なせてたまつかよ。お前が死んだら俺まで道連れだからな。オイ、さつさと俺の名前を呼べ！』

名前？だあから知らねーって

『馬鹿がよく考えろ！もう一人のお前、此処は戦場、そんでこの格好をよーく見やがれ！』

！そーゆうことが。ったく！…いやな名前だぜ

オメーの名は――

「…駆ける——白夜叉」

「！」

突風に天パが益々乱れる。

そんじょそこらのものと同じだった筈の刀は、名前を呼んだ途端に水面の波紋が広がるかのように真っ白に染まっていった。

それと同時に、身体中に力が、興奮が物凄い勢いで沸き上がる。

俺の背後にいた男は突風が吹いた瞬間に跳び退いたらしい。

おかげで首は解放され助かった。

男を振り返ると、余程驚いたらしく目を僅かに見開き俺を凝視していた。

かと思えば、とても面白そうな、嫌な笑みを浮かべた。

「…驚いた。まさか死神になりたてのヒヨッコが、これほど簡単に

始解に至るとはね。益々気に入ったよ」

「そりゃどーも。だが、俺アこっから出ないといけないんでね。そろそろ退散させてもらうぜ？」

男に向かい刀を構える。こいつの使い方はこいつ自身に教えて貰った。

刀>こいつくが俺自身か、嬉しかねえな。

にやりと笑う。

俺はそのまま男に刀を振り落とす。

だがこの軌道では男には届かないだろう。

男も分かっているようで、刀をゆったり構え、そこから動かない。

——ま、それでいいんだけどな

そのまま勢いよく何もない空間を切った。

「!?!?——斬魄刀の力か!」

俺と男の間に亀裂が入り、その裂け目が大きく開いていく。開いた先には——街並みが広がっていた。

そして俺は、迷う事なくその割れ目に飛び込んだ。

.

「02：顔が近いっ（CV：杉田）」（前書き）

はじめまして灰汁です。注意ですが作者はBLEACHの単行本を一冊も持っていないません。ネットで調べたりはするのですが、もし矛盾や誤字・脱字などございましたら章番号や違っていた部分を添えてご指摘いただけると助かります。

「02：顔が近いっ（CV：杉田）」

「雲一つねえ真っ青な空がこんな間近で見られるたあな…」

俺は坂田銀時。好きなものは糖分だ。

俺は今日、神楽も新八も定春もいない万事屋の中でいつものようにソファで寝ていた。

夢の中で急に引っ繰り返ったような感覚に襲われたかと思うといきなり森の中にいて、死にそうになったらいきなり戦場の中で自分と対峙して、割れ目を抜けると…いきなり雲の上で。

「って、言ってる場合かアアア！コレマジで死ぬウウウ！」

ああ、（いるかわかんないけど）天国のお父さん、お母さん。僕もこれからそちらへ行きます。だからたくさん糖分を用意して待っていてくださいね。主にパフェ。

悠長にそんなことを考えている間にも、落ちる速度は上がっていく。雲を通過した辺りでは、雲が綿飴ではなかった事実心底落ち込む程の余裕があったが、地面が間近に迫ってきたころの取り乱し様など、ドS王子に見られでもしたら暫らくヤツをご主人様と呼ばされる事態にさえなりかねないほど情けなくみつともなかった。

もう少しで短い人生を終えるといったところで、布のようなものに包まれて、一気に減速した。

「おやあ？何が降ってきたのかと思ったら死神さんじゃないっすか。おっかしいなあ、今日は降らないって予報だったのに…」

気の抜けるような声が耳に入ってきたが、俺にはそんなこと気にする余裕はまるでない。

生きてる、のか？

でも視界が真っ暗なんです。というか息苦しい。

あれ、全身から嫌な汁、いや汗が。さっきいい運動したばっかだから銀さん汗臭いんだよね。

自分でわかる、さっきから鼻にツーンってくるもの。あの、アレ、華麗臭的なものが。

——ああ、ちびつたな。

いや、ダバダバは出してないよ？銀さんももうイイ年したオッサンだからね。そんな醜態曝せないわけよ。チョロツとな、チョロツとだけな…

「あらら、氣い失っちゃいましたねえ」

気が付いたら、目の前に髭メガネの妖精さんが。
まさに目と鼻の先に。

「…ば、あばばばばっふあああああ!!!!?」

「おお、それだけいい反応ができれば大丈夫でしょう」

ち、ぢんだ。寿命が確実に十年分は縮んだ。

これは人間だったのか。心臓に悪い顔しやがって！

ん？そっぴいゃここアどこなんだ？

というかこのいかついオッサンは誰なんだ？

「ここは浦原商店といしまして、私の名は鉄裁でございます。ここ
の主人は只今奥で仕事をしておりますが…」

「って、あれエ!?俺今心読まれた?鉄裁さん今俺の心読んだよ!」

「あまり騒がれてはお身体に障りますぞ」

謎の大男、鉄裁さんにビビっていると、奥の襖から人が出てきた。
第一印象は…うん、胡散臭い。

「おや、目が覚めましたか。どつか痛いところありませんか？」

「いや、ないと思、っていただだ！何これ！？身体中痛い！」

体を起こそうとした瞬間、全身に走る痛みで顔をしかめた。

おかしい。気を失っていたようだが、その前に怪我を負った記憶はない…と思う。

状況がよくわからず、一生懸命記憶を辿っていた俺の思考は、あの間延びしたような声によって遮られた。

「いやあ、アナタが落っこってきたんで受けとめたのはよかったんですけどね。ここまで運ぼうとした時に何度か落っことしちゃいまして。大丈夫ですかあ？」

「いやいやいや、アンタこれが大丈夫に見えるんですかコノヤロー！」

「なんかアナタ丈夫そうじゃないですか、頭が」

「全身複雑骨折にしてやるーか」

しかし、とりあえずは助かったようで一安心だ。
それにしても、気を失う前のあの出来事は夢…ではないのだろう。
自分の格好を見てそう確信する。

今着ている見馴れない黒い服に、自分が寝ている布団の脇に横たわっている普段の自分が持つことのないもの――柄の赤い真剣。
『名前』を呼んだ後真っ白になっていたが、今は漆黒の鞘に納まる普通の刀だ。

おそらく抜いても純白ではなく、鈍い銀色が覗くことだろう。
ということは、あの胡散臭い男（目の前の下駄帽子も胡散臭いが）に遭遇したことも夢ではなかった訳で。

よく生きてたなあ、俺

あの冷たい痺れるような感覚は、いまだ身体に残っている。
きっと相当な実力者だったに違いない。

それにあの目には見覚えがある。

俺の幼なじみの黒いワンコを飼ってるとか言ってる包帯野郎、あいつとどこことなく似ている狂気を宿した目。

あーいう奴らってなんでああわざとらしい笑顔をはつつけてやがんのかね。

思い返して身震いしていると、俺の真っ青な顔を見て具合が悪くなったのかと勘違いした鉄裁さんに無理矢理寝かしつけられた。

…子守唄は勘弁してほしい。

.

「03・並ぶはずのない二つの顔」

九死に一生という、そう何度も体験できるものではない貴重な経験を得た男―銀時は、命の恩人（？）である謎の下駄帽子の店に、休養のため置かせてもらってしばらく経つ。

浦原商店の面々はなかなか個性的だった。…まあ銀時の周りも相当なものだが。

しかしこの店は色々と胡散臭い。いきなり空から降ってきた銀時だ、何かしら聴かれると思っていたが、どうやら彼方から聴くつもりはないらしい。

銀時は

「この店には訳ありな奴等がよく来るのか。そういう店なのか」と問いたくなったが、それは別に聞かなくてもいいことだろう、とその問いを呑み込んだ。

ただ、“死神”やら“虚”というものが存在するらしく、それについて少し教えてもらった。そして銀時も死神の一人だということを知ってもらった時は、暫く安心してしまった。

え、何？俺って死んでんの？そうなの？

否定はされなかった。

初めの内は、最初の銀時の反応を面白がった鉄裁さんに仕掛けられる最高に強力な“目覚まし”にて早朝五時には起こされていたが、今ではそれにも慣れ、安眠の妨害を感じながらも七時までの睡眠を勝ち取っていた。ただし、七時を過ぎればやんちゃな子供たちに殺されかけるため自ら起きる。お陰で万事屋での不健康だった生活習慣も改善されてきている。

しかし、傷を癒すためにこの店にいるはずなのだが、気が付くと生傷が絶えないのは何故だ。頭を抱える日々である。

そんなこんなでようやく（初めに負った）傷が癒えてきていた、そんなある日の事。

「浦原ー！浦原はいるかー！」

「おや、お客さんっすねえ。はい、今行きますう！」

（客なんて来るのか、こんな店に）

よく通る女の声に呼ばれていった浦原の背を見ながら、少しだけ失礼な事を考えた。

実際銀時がこの店に来てから一度も客なんてものが来るのを見ていないのだ。そう思われても仕方ないといえばそうなのだが。

なんとなく初めての客に興味を持った銀時は、店の方へと見に行くことにした。

「朽木さんに黒崎さん、久しぶりじゃないっすかあ。今日は何用で？」

「いや、最近虚が大量発生しているようだな。何か知らないか？」

「大量発生っすか。そういえば最近多い気もしますが…、知りませんねえ」

「そっか…、ありがとよ浦原さん。ん？そこに誰かいんのか？」

オレンジ頭の男が銀時に気付く。

当の銀時は驚いていた。

どうも普通の客ではないらしい二人組と慣れたように浦原が話しているの、なんとなく気配を殺して盗み聞きしていたのだ。

まあ気配を消さずとも普通の人間には死神である自分の姿は見えないらしいので隠れる必要もなかった、筈なのだが…。

「ああ、彼は坂田さんっすよ。訳ありの死神さんで、怪我が治るまでここに居候してるんですよ」

「あー、気付いたら死神やってた坂田銀時です。銀さんって呼んでねー」

「はじめまして銀時殿。私は朽木ルキアと申します」

「俺は黒崎一護っていいいます」

「へえ、ルキアに尊ね。随分かわいい名前

「一等賞の一に、守護者の護だ！」

…なんだそっちか」

普通に自己紹介も済んでしまい、銀時は少しどうでもよくなってきた

ているのか、その対応は普段通りだ。

それでも、なぜ死神という幽れ…スタンドと同じような存在である自分が、普通にこの二人に見えているのかは気になるので聞いた。

「ああ、だって彼らも死神っすから」

…いや、どう見ても人間だよな。

その辺りは鉄裁さんが簡単に教えてくれた。

坂田さんは順応が早くて助かりますう、などと浦原に言われたが、これはいわば慣れた。

銀時の周りには常にトラブルがついてまわる。天人来襲だとかスタンド温泉だとかがあつたせいか、死神とか虚とかも似たようなもん
だろ、てなわけである。

「あ、そうだ」

唐突に声を上げた浦原に皆目を向ける。

「坂田さん、黒崎さん家に泊めてもらえばいいじゃないっすかあ！
黒崎さんや朽木さんならアタシよりも死神とかについて詳しく説明
してくれるでしょうし。（何より金銭的にいなくなってもらったほ
うが助かりますし。）どうです？」

「俺ア食い物に困らなけりやあどこでもいいけどよ。一護はいいの
か？」

「いや、いいのかって言われるとあんま良くねえんだけど…。ルキアもいるからあんまゆったりはできねえ。それでもいいんじゃないぜ」

「私は構わんぞ」

「つーかお前が構え。一応女なんだから」

「一応とはなんだ！」

一護とルキアの漫才を聞きながら、聞いちゃいないだろうがこれくらいよろしく、などと挨拶をする銀時を尻目に、上手く居候を追い出せたことにほくそ笑む浦原商店メンバー！。

「坂田さん、荷物まとめておきましたからねえ」

「早っ！」

…厄介払いしたかったただけだろ、とは言わない。

ここに住んでいる間散々（主に子供達に）いびられ続けていたため、分かり切っていた事だ。今更だろう。

「それじゃあお世話になりましたー」

「用があればいつでも来てくださいねえ。品揃えは豊富っすから」

できればあのガキどもには会いたくないな、などと思いながら、おう、とだけ応えておいた。

改めて見る町並みは、やはり自分の知っているものとはかけ離れていた。人の服装や髪型、車、空。ありとあらゆるものが、違う。多分ここには、いや、この世界には、神楽や新八、自分の知っている人間は一人残らずいないだろう。妙な確信があった。

一護の家に向かう道すがら、自分の知らない夕日を見ながら、少しだけ寂しさを覚えた銀時であった。

「04：パフェ、会議、窓辺から」

「お父さん、食後のアレ頼むわ」

「ほれ銀さん、冷やしておいたぞー！美味そうにできてるだろ？」

「それ作ったの私だよ！」

「んおー、そこらのパフェとは格が違うな。どんどん美味くなってるよ」

「本当！？」

「ハッハッハ流石俺の娘だ！遊子はいいお嫁さんになれるぞ！嫁に出す気はないがな！」

「親バカもいい加減にしとけよクソ親父」

「夏梨は手厳しいなあ。たまには父さんの胸の中で思いっきり甘えてもいいんだぞおーう！（ル○ンダイブ）」

「近寄るな変態！」

「おぶっー！」

「仲良いな。どっかのゴリラと怪力女を思い出すよ」

「なんかすげー馴染んでんだけど」

「銀時殿は凄いな。私など一護のクラスに溶け込むのにとっても苦労したというのに…。精進せねば！」

「向上心も大事だけどよ、まず参考文献を変えることを勧めるぜ。つーか義骸に入ってるっていつても、正体不明の男をあんな気軽に迎え入れる俺の家族がわかんねーよ…」

銀時が黒崎家に来てまだ一週間。

もはや家族のように馴染みきっているのは銀時の人柄の成せる業なのか、単に黒崎家の面々が警戒しなさすぎるせいなのか、…あるいは両方だろうが。

それでも一護も銀時の人に惹かれはじめている、それで十分な気がした。

銀時自身のことについてももう少し知っておきたいと思うが。

現在銀時がこうして家族と普通に接触できるのは義骸に入っているおかげだ。

義骸を使うことになった理由は、一護にとってはそんな事で済ませられるような内容で。

黒崎家に来た初日、銀時が甘味が欲しいと騒ぎだしたのだ。

家に入るとすぐ探索を始めた銀時は、たまたま遊子がお菓子を作っているのを目にし、途端に糖分摂取の義務を思い出したのだという。なんでも、浦原商店に置かせてもらっていたときの食事の時間は苦

痛以外の何物でもなく、我慢できず甘味を要求したときは八つの眼光にその身を貫かれる幻覚まで見たそうで、それ以来甘味などろくに摂っていないらしい。

まあそれはともかく、義骸があつたほうが便利ということもあり、浦原に頼んで作ってもらったのが四日前。

家族にどう説明しようとして一護が悩んでいた間に、何を言ったのかケーキ（遊子作）を食べながら銀時は家族に馴染みきっていた。

幸せそうにケーキを頬張りながら一心と談笑しているのを見た一護は、複雑な心境で溜息を吐いたのだった。

遊子も銀時がとても美味しそうに食べてくれるので、作りがいがあるとお菓子作りの本まで買っていた。

しかし銀時は糖尿病寸前だと聞いたが、医者の子息としては止めたほうがいいのだろうか…。

つか親父止めろよ。

「一護」

「うわっ！？銀さん近えよ！」

思考に耽っていたらしく、一護の間近で名を呼ぶ銀時に気付くのが遅れてしまったようだ。

「おう悪い、呼んでも気付かねえから。今日は忙しくなさそうだからな。そろそろ死神とかについて詳しく教えてくんねえか？帽子さ

んの話じゃ適當すぎてよく分かんなかったんでよ」

そうだった。

ここ最近例の虚大量発生により夜は外にすることが多く忙しかった。銀時がこの家に來た目的を思い出した一護は、もしかしたら今まで毎晩虚退治でヘトヘトになった一護に氣を使って言いださなかったのかと、仕方ないとはいえ申し訳なく思う。

とりあえず代行証が沈黙している今のうちに一護の部屋で話すということになった。

その後遊子のデザートを甚く氣に入った銀時が遊子に明日のデザートのリクエストを伝える行き、家族が寢静まった頃を見計らって一護の部屋でひっそりと会議が行われた。

「大体は分かった。：例外はあるにしろ大体は死んだヤツの一部になるもんなんだな？死神つてのは。

：新ハイイイイ！神楽アアア！定春ウウウ！お前らを置いて先に逝っちまった俺を許してくれ！」

「ぎ、銀時殿！もしかしたら一護のようにまだどこかに身体が残っているのでは？だからそう氣を落とさずに」

「残ってたとしてもそれって要は死体なんだろ？俺が死神になって二週間は経ってるんだ。ど、どっかしら腐っててもおかしくねえ。：もし俺が身体に戻れたとしてもお前、それっておまっゾンビじゃねえかアアア！」

「でもよ、銀さんが死神になった経緯がわかんねえからまだそうとも言いきれねえって。そーいや銀さんが死神になる前ってどこにいたんだ？この辺のこと全然知らないんだろ？」

「ああ、町並みも全然違うからな。俺が住んでたのは江戸の歌舞伎町だよ」

……………。

「江戸？」

「そう江戸」

「…銀さんっていつの時代の人？つーか何してた人？」

「いつの時代って何それ顔？顔が原始人っぽいつてか？…まあ何って言われると困るけどなあ、自由人的な…あ！攘夷戦争やってたわ」

攘夷？幕末のあの戦争のことか。そんなもの百年以上前の話じゃないか。それで身体がどうのってそんなもの残っている訳がない。

もしかすると銀時はルキア達と同じくらい年いってるのでは？

死神につい最近なったというのも記憶喪失になっているとかで勘違いしてるだけなのでは？

「だが銀時殿は今の時代のものもよく知っているように見えたが…」

「確かに。ウオシュレットどころか水洗トイレだってそんな時代にあるわけねーよな」

「まあ天人が来るまではそんなもんなかったんだけどな。だから何そんな時代って。どんな時代？」

「天人？なんだそれ」

「シカトかコノヤロー。天人ってのはアレだ、カクカクシカジカ」

「いや分かんねーよ」

「話すと長くなるんだ、察してくれ」

そついうものの銀時は自分の生きていた町について簡単に掻い摘んで説明した。

銀時の話はこの世界にとって歴史が根底から覆されるようなものだった。だがそんなことが百何年前に起きていたなら、今ごろは某猫型ロボットが量産されるような近未来的世界になっているに違いない。

あくまで予想だが、言うなればパラレルワールドというものではないだろうか。平行といっても今の時代ではなく、幕末のパラレルワールドだ。

要するに過去は過去だが自分達が知っている過去とは全く異なる過去というわけだ。

銀時もまさか未来だとは思っていなかったまでも、何となく違う世界だと感じていたようだ。

「まあ俺がいたところがパラレルワールドだとしてもよ、そっちに戻るなんてことができるかつー話だよな。一護、手っ取り早くどこもドア出してくれ」

「出せるか！しかたねえな、今日はここまでにして明日浦原さんと行くぞ。あの人なら四次元○ケットくらい作ってくれぞ

《ホローウ！！ホローウ！！》

うおお！？」

「！つまた虚か！一護！」

「分かってる！」

一護が突然喚きだした死神代行証を引っ掴んで自らの胸に当て死神化する。

銀時は虚が出るたびに死神化を何回か見ているが、脱け殻となった一護の身体が地面にゴトリと落ちるさまは何回見ても気分の良いものではない。まして、自分は似たような場面を何回も見てきたから尚のこと。

そんなことをぼんやり考えていた銀時は、窓枠に足をかけ、今にも外に出ていきそうな一護を見てハッとして名を呼んだ。

怪訝そうに振り返った一護に、少し前から考えていた旨を伝えようと口を開いた。

「これから虚退治行くんだろ？邪魔じゃなけりや俺も連れてってくんねーか？」

.

「05：夜叉起きて」

「銀時イイ！敵に斬られるようなヘマアしてみろ、そんときや俺がトドメ刺してやるからなア！」

「人の心配してる暇あんならテメーの心配でもしてろやバカ杉イイ！」

「テメツ、今すぐ叩ツ斬んぞコラア！」

「上等だアアア！テメーの足ぶった斬って更に身長低くしてやらあ！」

「アツハツハ！銀時も高杉も元気いっぱいじゃのお！ワシも交ぜ」

「モジャモジャテメーは黙ってる！」

「ぎゃふん！」

「こらっ、二人ともいくら戦中だからってはやぎすぎては駄目だぞ？もつと周りの迷惑も考えなさい」

「テメーは俺の母ちゃんか！気持ちわりいんだよツラア！」

「ツラじゃない桂だアアア！」

『桂だ！向こうに“狂乱の貴公子”桂がいるっばい！首を取れエエエ！』

「……………。てへっ」

「てへっじゃねエエエエ！テメーツラア！何わざわざ自分の居場所教えてやがるこのバカ！」

『あそこだ！あの鬱陶しい長髪が桂か？』

「桂じゃないツラだ！あつ、違った桂だ。スンマツセー間違えましたア！やっぱり桂でしたア！」

「…テメーもう黙ってるオオオオ！」

「ひでぶ！…なんでワシ？」

『桂の隣にいる奴って白夜叉か？』

『おい、高杉に坂本もいるぞ！』

『討ち取れエエエエ！！』

「チッ、バカヅラのせいで敵が増えやがった」

「だがこの程度じゃア前菜にもなんねえよ」

「アッハッハ楽勝じゃな！」

「足りないようならまだ増やせるが？」

「…増やそうが増やすまいが関係ねえよ。ここを片付けて周りの奴らもぶった斬る。帰れたら祝杯でも上げようじゃねえか！」

殴る、打つ、蹴る、跳んで、転がって、防ぎ、逸らし、裂いて、斬り伏せる

そしてまた、次

ギアアアアアア！

ギイイイツ！

「…おいルキア、なんか銀さんあの調子だと1人で片付けちゃうんじゃないかねえか？」

銀時に頼まれ虚退治に連れてきたのだが、戦闘が始まるまで一護は正直銀時の力を見くびっていた。

銀時がこの世界に来てまだ一月もたっておらず、死神になってから

の日数もそれと同じだ。

始解もまだだと思っていたため、刀を始解状態で振るっている銀時に2人して驚き今し方まで固まっていた。ルキアも同じ考えだったらしい。

「銀時殿のあの霊圧、下手したらお前と同等の霊圧を有しているやもしれぬな。それに刀の扱いに長けているようだが、戦争に出ていたと言っていたな」

「ああ。銀さんってなんか侍って感じだし、あんな死んだ魚のような目してても刀に関しては達人だったのかもな」

「しかし本当に普段の死んだ魚のような目をした銀時殿とはまるで雰囲気が違うな。特に先程の小僧が虚に襲われているのを見たときのあの殺気は凄まじかった……」

ここに着いたとき、黒い短髪眼鏡の少年が数匹の虚に囲まれていて、手に持つ木の棒を必死に振り回している姿を見つけた。

霊感が強いのだろう、虚が見えているらしい少年は、周りを取り囲むように襲いくる化け物を退けようとして、しかし対した効果もなく今にも取って食われそうになっていた。

少年を虚の手が掴もうとしたその時、一護とルキアは後ろにいた銀時から叫び声とただならぬ殺気を浴びた。

驚き振り返る間もなく二人の間を銀色が滑り、目前には少年を庇うように立ち始解状態の刀を構える銀時がいた。

そこからはもう銀時の独壇場で、少年を背の電柱に隠し、虚を近付けるどころかぐいぐい押し返し、ついには残り1匹を残すのみとなっていた。

思い出していた。

しばらく顔を見ていない血の繋がらない大切な家族。
虚に襲われていたどこにでもいそうな地味な眼鏡の少年、姿が被った。

少年は自分の目の前で鋭い爪を持つ化け物に切り裂かれそうになっている。

血の気が引いた、すぐ様頭に血が昇る。

気付けば少年を背に庇い、持つ刀は白く。

思い出していた。

かつて共に戦った仲間を、若かった自分を。

戦争の中、求めるように血を浴びる夜叉。

若気の至りだと思っていたが…これは坂田銀時という男の本質だったのかもしれない。

年甲斐もなく興奮する己を感じながら、あの頃のように一直線に刀を敵に振り下ろした。

その場にいた虚を全て斬り伏せ戻ってきた銀時に、一護とルキアは恐れを感じずにはいられなかった。

ギラギラと輝く目に見え隠れする、底冷えするほどの残虐性を秘めた夜叉の魂。

普段のだらけてはいるが優しい安心できるあの男と同一人物とは思えなかった。

そして銀時をより冷たく見せている原因はその手に握られた刀だ。ルキアの袖白雪と似ているが、それは初見だけだった。

始解した直後の白かった刀は、虚を斬る度に薄く赤みを帯びていき、今では赤に近いピンク色に染まっていた。

まるで血を吸ったかのように、それが気味の悪さを際立たせていた。

銀時はこれを何と呼んだかは分からなかったが、いい名ではないだろう。ルキアは無意識に顔をしかめた。

「…わりい、仕事取っちゃったな」

銀時はばつの悪そうな顔に苦笑を浮かべ、元に戻った刀を鞘に収めながらぼそぼそ謝る。

2人はその言葉にはっとして各々不自然でないように言葉を返した。

「あの…お、じさん」

声に振り向くと、電柱から先程の少年が恐る恐る出てきた。余程怖かったのだろう。擦れた声は涙で震え、泣いた目は赤く充血している。

間近で見ると銀時が重ねた人物とは案外似ていなかったが、やはりそのなりは万事屋の従業員——新八を思わせた。

銀時は少年が無事だったことに一気に気が抜けた。

「おじさんじゃねえお兄さんだ。銀さんまだピチピチだからね。んで、怪我はあるか？」

「え、あ、さつき、転んだときに」

「膝か。まあこの程度なら唾つけときゃ治んだろ。男ならこれくらい我慢できるな？」

「うん」

弱々しい声ながらも力強く頷いた少年に、銀時も満足そうに少年の頭を撫でた。

「まったくガキがこんな時間にふらついてんじゃねえよ。家はこの近くか？」

「うん」

「ひとりで帰れるな？」

「…うん」

不安そうに頷く少年。

いくら家が近くても、またあの恐ろしい生き物が出てきたらと思うと怖いのだろう。

銀時は仕方ねーなとため息をつく。

「莓、ルキア、俺ちよっくらこいつ送りに行くからよ、先帰っててくれ」

「一護だ。俺らもついてくよ。銀さん道わかんないだろ？」

「いや、お前らがいない時にちよくちよく散歩してたから分かるよ。それにもうちよつと外の空気吸っててえからな」

言外にひとりにしてくれというと、二人はひとつ頷いて帰っていった。

先程のこともあったので聞き辛かったのだろうなと思いつつ見えなくなるまで見送り、さあ行くかと少年に向き直った。

「！」

そこに少年はいなかった。

代わりに、人一人通れるくらいの黒い歪な割れ目がぽっかり口を開けていた。

それは銀時の斬魄刀の能力によりできる切り裂かれた空間によく似ていた。

以前見たときと違ったのは、覗く空間の先が街並みではなく先の見えぬ暗闇だということだ。

いや、この黒は闇などではなく、もっと質量を持った、絵の具のような黒。

銀時はそれを見た瞬間、本能的に距離を取ろうと後ろに退ろうとした。

「おにいさん、送ってくれるんでしょ？ ついでだからよっていつてよ」

背後から、抑揚のない高い声。

弾かれたように振り向けばそこには先程の少年が背を小さい二つの手で支えるように押している。

退ろうにも後ろに壁でもあるかのようにびくともしない事実、銀時は混乱する。

「っおま、なに」

「おにいさん、ここが僕の家だよ」

漆黒に指を向け、幼い顔にいやらしい笑みをのせる。

未だに混乱しているが、ただ自分の前後にあるものは危険だということは分かった。

しかしそれ以上考える暇もなく、

「ゆっくりしてってね？」

「うおわっ！？」

小さな肢体からは想像もできない、まるでボディビルダーに全力で突き飛ばされたかのような力でもって漆黒に放り入れられた。

「06…どちらかというとダックスフンド派」

「おはよう坂田」

夢の中で大量のパフェに囲まれ幸せそうに締めりのない顔をしていたら、不意に顔に湿った生暖かい風を感じ、徐々に意識がパフェから遠ざかっていく。

さらに自分を呼ぶ声で目の前にあった“ビッグマンゴーマウンテンパフェ”は完全に霧散し、銀時は声の主に殺意を覚えながらも嫌々目を開け――…

「う、おおお！？」

「おはよう」

「ばうっ」

いつかの鉄裁さんのようなドッキリモーニングだ。
いや朝かどうかは不明だが。

とにかく目の前に、というか密着しているもの。

銀時の鼻に押し付けられた湿った黒い粒に、2つ横に並んだ黒いビ―玉、否、これらは鼻と目だ。

驚き引き剥がすと、それは大きな黒い犬だった。
銀時に覆いかぶさるようにのしかかるその犬は、恐らくドーベルマンだと思われる。

ただ、見事な漆黒の毛並みや窪んだ鈍く光るその目が、その犬を何か違うもののように思わせた。

突然の事態にしばし茫然としていた銀時は、蠟燭の明かりしか光源のない部屋の角、自分に乗る犬の背景に、覚えのある人間がいることに気が付いた。

「！お前さっきの、」

「ああ、よく寝ていたね。ほら、こっちにおいでいよう。坂田が困っているだろう？」

「ばわふっ」

「え、この犬の名前よりもよって勲いさなつーの？ある意味動物虐待だよそれ。ゴリラに進化、いや退化しちゃうよ？こいつのために一刻も早く改名を——、っていやいやそうじゃねーだろ俺。：お前本当にさっきのガキか？」

ついつつかりツツコンでしまったがそんな場合ではなかった。

どうやら気絶していたらしい銀時は、目の前にいる少年が先ほど自分を暗い穴にとんでもない力で投げ入れたことをすっかり覚えていた。

しかし、あの時普通の少年が無機質な人形のように変貌したことに狼狽えた銀時だったが、今の少年の落ち着いた大人のような雰囲気、度重なる変化に、確認は疑問に変わっていた。

「そうだが…、ガキというのは失礼だろう。僕はハチという」

「ハチか。犬みてーな名前だな。勲と名前交換したほうがいいんじゃないーの」

「いや、これは仮の名だ。正式な名前は僕にはない。だから好きに呼んでもらって構わないよ。この“ハチ”という名は君の家族の新八君からもじっているだけだからね」

周囲を見回しながら聴いていた銀時は、さらりと出たよく知った名前に、死んだ魚のような目を若干丸くしてハチを見た。

「なんでお前新八のこと知ってんだよ。というか俺の名前も」

「調べたんだよ。この容姿も新八君とよく似ているだろう？この方が君も油断してくれると思ってね。不自然にならないようパーツは多少いじり年も随分幼くして新八君本人に見えないように工夫しておいた。君がうまく引つ掛けてくれて嬉しいよ」

面白そうにニコニコと笑いながら淡々と述べるハチに、銀時はさらに混乱した。

見渡した限り、今銀時がいる場所は室内で、それも窓や出入口すらないようだった。

この狭く天井の高い四角い部屋はシンプルな造りになっており、どことなくヨーロッパ風の教会のようなイメージだが、橙に揺らめく薄暗い不気味な雰囲気、神聖さを微塵も感じさせない。

下に広がる冷たい大理石の床が、寂しい灯りにぬらぬらと揺れ生き物のようだ。

牢屋然とした部屋に困惑と不信感を深めつつ、問うべき事項を整理して口を開く。

「…色々と聞きたいことはあるけどよ、先ずなんで俺は誘拐されたんだよ。というか見た目的に立場逆じゃね？なんでいい年したオッサンがこんなガキに攫われなきゃなんねーの？しっかりしろよ俺」

「まあ仕方ないさ。誰しも子供と仲のよい知人にはそうそう警戒心など抱かないだろう。僕はそれを狙ったのだからね。さて、誘拐の理由なのだが、君には少し協力してもらいたいことがあってね。わざわざ君を異世界から連れてきたのも君にしかできない仕事があるからなのだよ」

「異世かつ、ってお前が元凶かよ！仕事オ？わざわざそんなことのために俺を巻き込んだってえのか？冗談じゃねえ。言っとくが俺アいかがわしいやつの仕事は一切受けねーって決めてんだよ。オメーのいう異世界つてのが俺の世界ならさっさと帰してくれ。ガキ共も心配してるだろうしな」

嫌そうにきつぱり断わった銀時に、予想していたらしいハチは尖った八重歯を覗かせニヤと笑った。

「いや、君を帰すのは仕事が終わった後だ。たぶん帰す方法は僕しか知らないはずだから君に拒否権はないよ。僕はボディーガードを雇いたくてね。勲だけでは心許ないだろう？だから是非強い君に頼

もうと思ったんだ」

「いや勲ならできるよ、勲はやればできる子だよ。というかボディガードって別に俺じゃなくてもよくね？というかオメーさっきの馬鹿力あればボディーをガードしてもらう必要ねーだろ。オメーも下の毛生えてんならテメーの身ぐらいテメーでガードしやがれっんだ」

「いや僕は下の方はツルツルなんだ。だからボーボーの坂田に助けてほしいのだよ」

「オメー俺がツルツルだったらどうすんだよ。そんな趣味ねーけど」

「君がツルツルの変態でも君にしか頼まないよ。僕はその強さを買っているのだからね」

目的が測れない。

ボディーガードという名目で厄介な事に巻き込まれそうな予感はいしひし感じている。

ここは無視して斬魄刀の能力でさっさとんとんずらしたいところだが、今のところハチは銀時がいた世界の事を知っていて、唯一そこに戻る手段を知っているであろう人物だ。

銀時には異世界へ行く方法などまるで思い付かないし、もしやと思いちよつと前に胡散臭い微笑みオールバックから逃げた時のように、斬魄刀の能力で空間を斬ろうとしたがそう上手くいくはずもなく、ただ空気を裂くのみだったことは記憶に新しい。

どうやらこの刀は随分な気分屋らしいが、斬魄刀とは持ち主に似るものなのか。

兎にも角にも早く帰りたい銀時にとって、いくらハチが諸悪の根源であろうとも多少厄介な事に巻き込まれようとも、仕事が終われば帰すと言っている以上ハチに頼るしかないだろう。ハチの言うとおり拒否権はなかった。

厄介ごとに巻き込まれやすいのは体質なのだろうかと思を吐くと、銀時の上から退いた勲と名付けられた可哀相な犬が、ずっと近くにいたのか、銀時の周りを落ち着かない様子で歩き回っている。時折銀時の服に鼻を押し付けてはぷしゅんとくしゃみをするものだから、主人に似て失礼な犬だと体臭を気にしながら一睨みくれてやると、何を思ったか勲は嬉しそうに尻尾を振りながら再びのしかかり、銀時は勢いに任せ後頭部を強打するはめになった。

…だんだんどうでもよくなってきた。

「随分と仲良しじゃないか。勲は人には慣れているが初対面でそれほどはしゃぐのはあまり見ないよ。君が飼っている定春という犬にもよく懐かれていますし、犬に好かれやすいのだね」

「いやだからなんで知ってんだっての。いくら銀さんが人気者だからってストーリーカーはまずいよ君イ。銀さんは皆の銀さんだからさあ」

「さて雑談もこの辺にしておいて、仕事は受けてくれるのかね？」

体勢のせいで齡10歳に見える子供に見下される形となり、得体の知れない威圧感とわざとらしい嘲笑を浴びせられれば大人気なくも腹が立つ。

銀時は立ち上がるといかにも渋々というような顔を作って投げ遣り

に了承した。

「いや待て、そう言えばちゃんと報酬は出るんだろうな。ただ働きはごめんだぜ？」

ハチの容姿は至って普通の少年Bで、週の小遣いは500円程度と
いったところだ。

見た目だけなら報酬など期待できない。

よほど欲しいものも我慢して貯金していかない限り、いくら銀時が危険な仕事をこなそうと懐に入ってくるのはやはり小遣い程度だろう。
割に合わなさすぎる。

「そんなものないに決まってるだろう。君はこんな幼気な子供からお金を搾り取るつもりなのか？強いて言うなら君の世界に帰してあげることが報酬だな。十分だろう」

「泣かすぞクソガキ。ったく、せめて1日に1回糖分摂取させてくれるなら俺だって文句言わねえよ」

「それだけでいいのかい？安上がりで助かるよ。といってもあまり高価なものは買ってあげられないがね。それでは取引成立ということでもいいかね？」

一々にやつきながら鼻に付くしゃべり方をするやつだ。

こいつには黠しか友達がいないに違いないと勝手な想像をする。

こんな態度で話を進められると思わず拒否したくなるが、自分のた

めにもここは喉まで出かった否定文を呑み込む。

「…ああ。だが報酬の件忘れんじゃねえぞ」

「もちろんだとも」

こうして小さな依頼主と無気力ボディーガードの奇妙な3日間が始まった。

「07：狼の皮を被った狼少年」

「よお、たでえまっと」

「銀さん！昨日どうしたんだよ、夜になっても帰ってこなかったから何かあったんじゃないかって心配してたんだぜ！？」

八チと出会った翌日の朝方、窓から入りながら声をかける銀時に目を丸くした一護は、すぐに少し怒った風な、しかし若干の安堵を乗せた顔でプチ家出をした子供を叱る親のように声を尖らせた。それに新八の顔を思い浮かべた銀時の横で押し入れの戸がスルスルと開き、隙間からルキアの顔がニョッキリ生えた。

「最終的には『どうせ迷子だろ』と言って搜索を放棄していたではないか。明日には帰ってくるだろうとどうでもよさそうに」

「それはお前が言ったんだろうが！真っ先に寝たくせに何自分だけ心配してましたみたいな顔してんだ！」

しっかり会話に参加してくるルキアに賑やかにツッコむ一護。

「おいおい莓くんってば薄情者だなあ」

「一護だ！っだから違うって

「まっただ。仲間が行方不明になっていたというのに『ガキガキ

言いやがって、そのまま死ねばいいのに』などと、まあ、僕はそれには同意するがね」

——だから言つてね…え？」

「いや行方不明にしたのキミだからね。というかそれお前の本音だろ。お前が死ねばいいのにクソガキめ」

「…銀さん、その子…昨日の？」

いままで気配すら感じさせず、地蔵のように銀時の斜め後ろで三人の様子を楽しそうに眺めていたハチ。

ごく自然に会話に入ってきたことで、銀時に目を向けていた一護は一拍の間を置き、ようやくその子供の存在に気付いた。

ルキアは銀時の影で見えていなかった子供に目を向け

「昨日の？」と呟いているが、仕方ないだろう。

何せ新八がモデルであるために特徴など皆無であり、忘れてても何ら不思議はないと銀時は心中で豪語する。

その上昨日とは雰囲気がるで違く、別人のようなのだから。

その点一目で判つた一護はすごいと言えよう。

「あー、まあ色々あつてな。なんつーか訳あつて雇われたつーか強制ボランティアっつーか。とにかく依頼が済むまでしばらく面倒見てやることになったから。よろしくー」

「名前をハチという。ヨロシクー」

「よろしくーって、ええ！？その子親とかいねーの？つーかここに置くのかよ！」

一護は不満というより、すでに決定事項のようにトントン話を進める銀時に対する驚きの叫びをあげる。

それに対するふてぶてしい天パ男は、何でもないことのように流す。

「いーじゃんいーじゃん、別に今さらガキの1人や2人増えたって変わんねーだろ？大丈夫だって、こいつも世話になるんだから皿洗いくらいはやるって言ってるし」

俺はあんな暗い狭い部屋で生活するなんてごめんだし、とは銀時の本音だ。

依頼を受けた後、できれば常に近くにいたいとのハチの要望により、ではどこで生活するかとの問題が浮上した。といっても銀時の知り得る場所では浦原商店、黒崎家、ハチの部屋の3択しかないため、一番銀時が過ごしやすい（飽くまでも私情）黒崎家に白羽の矢がたったというわけだ。

このへんの事情はもちろん一護に言つつもりもない。

「ハチ殿は皿洗いができるのか？」

「ハチでいい。洗濯物も乾せるぞ。なんなら床掃除もするが」

「ほう、こんな小さいのに偉いではないか。銀さんとは大違いだな！」

「結構効いた今の」

「だあああつ！そういう問題じゃねーだろ！大体銀さん、この子…誘拐してきたんじゃないだろうな」

じと目で不名誉な疑惑を投げつける一護に、心外だと全力で否定する。

むしろ逆だ。いい歳した成人が一回りも二回りも小さい少年に無理矢理部屋に連れ込まれ…って、んなこと言えるか！

「あー、まあ頼むわ。そんな長くいるわけじゃねえだろうし、厄介な事にはならねえよ、…たぶん。お父さんらにも俺から話すからよ」

「途中のが気になるけどな…、わかったよ。とりあえず八チについて詳しく教え『ギヤアアアア！？』——っ！？」

突如響いた断末魔の叫びに話を遮られた一護は、一瞬呆気にとられた後、聞き覚えのある声に緊張し損だとばかりに眉を寄せ脱力した。何事かと気を張らせていた銀時も、一護のその様子に大事ではないと判断し、声の上がった出入口の向こうを確認しようと扉を開けた。

瞬間。

「ばわっふう！」

「うっ！オ！？」

「い、一護っ、助けてくれええい！」

黒い巨犬とそれにくわえられた喋るぬいぐるみが、降ってきた。

先ほどの絶叫はこのボロボロのぬいぐるみが黒い犬に襲われて発したもののらしい。

今日は土曜で一護も妹達も休みで、一心は朝早くから娘2人を連れてどこかに行っていたため、おかげでこの騒ぎを知られずに済んだ。ちなみに銀時は犬と衝突した後に後ろ足で急所を挟まれたらしい。床で声も上げられずもんどり打つ男を沈痛な表情で見やる一護は、顔を伏せ冥福を祈った。

「~~~~っ勝手に殺すな！まだおれのジョニーは健在だから！まだ本物にはなっていないから！」

「いやここで確認するなよ！」

仮にも目の前に女子がいると言っのに何をしてるんだこの男は。前を寛げるな。

「ああ、勲。見ないと思ったたら新しいおもちゃを見つけてきたのだね。だがおまえは僕のボディーガード1なのだからそばにいてくれないと困るよ」

「こやつは八千殿の犬なのか。うむ、中々に立派な犬だな。毛並みも美しい」

「そういつてもらえると僕としても嬉しい限りだよ」

ボディーガード2は俺か、俺は犬以下なのか、という銀時のツッコミはスルーされ、こちら二人はほのぼのした空気を纏い談笑している。

「無視してんじゃねー！この犬どうにかしてくれってんだ、コンチクショー！」

喚くぬいぐるみに初めて興味を示した銀時が、新しい玩具が気に入ったらしい勲からぬいぐるみを取り上げ、脚部をつまみあげる。

「うわっ、放しやがれ！その犬から助けてくれたことには感謝してやるがなあ、汚物を触るみたいに持ってんじゃねえ！」

「からくりなにコレ。喋ってる。なんか喋ってる。動いてる。なんなの？機械なのコレ」

「カラクリ？いや、機械的なもんじゃないよ。改造魂魄つつて、造られた魂がそのぬいぐるみに入ってるんだ。名前は改造魂魄だからコンな」

「へえ、魂ってなあ造れるもんなのかい。たまと同じようなもんなんかねえ」

しみじみと何かを思い出すように、銀時はコンのほつれたところから綿をほじくり出しながらぼやいている。

コンの悲痛な抗議は意識的に無視しているわけではないのだろう、きつと。

「——と、まあ俺もよく分かってねえから後はこの八子君に聞いてくれ」

昨晚の大体の事のあらましを伝えた銀時が八子を促す。

「ふむ。まず僕のことについてだが」

曰く、ハチは珍品コレクター兼怪盗で、実は勲はハチのコレクションの一つで、元は特殊な石で造られた犬の彫像を、これまた呪いの彫刻刀とやらで一削りしたところ動くようになったらしい。削った跡は脇腹辺りにまだ残っているらしく、確かに切り傷はあった。

そして銀時がこの世界に来たその日、珍しい姿見をターゲットにある組織の屋敷に盗みに入った、らしい。

その姿見とは望んだ魂を持つ者を映し出し、その者呼び寄せることができる代物で、盗みに入ったハチが偶々鏡を覗き込むと、丁度銀時の眠る姿が映りこみ、興味を持ったハチはそのまま銀時をこちらの世界へ引つ張り込んだ、そうだ。

しかし引つ張り込んだはいいものの、銀時は光となってどこかに飛んでいってしまい、その光を見た組織の者に見付かったハチは、何とか屋敷を脱して今まで銀時を探していた、と。

「……………」

嘘だな。満場一致だった。

三対の三白眼から放たれる疑惑の視線を浴びながらも、ハチは変わらず嫌な、今は面白そうな笑みを湛えたまま、全く堂々としたものである。

「……聞きてえことは山ほどあるが、とりあえずその“ある組織”
つてのはなんだ？」

「詳しくは知らない。恐らく宗教団体の一種で、きっと裏では世界
征服を目論む悪の組織として暗躍しているような輩だろう」

なるほど真面目に答えるつもりはないらしい。

終始変化のない笑顔で飄々と嘯く八チへの信頼度は今のところ1%
もない。

しかし0ではない。こういうやつは所々真実を折り込みつつ、大事
な部分は隠しながら話す。

組織やら怪盗やらは嘘、あるいは本当かもしれないが、重視するの
はそこではない。

恐らく事の流れは八チの話通りで、目的は何にしる八チが姿見を目
当てにどこかを訪れ（侵入し）、八チの手で銀時を呼び出した、と
見ておく。

「あと一番重要な事、俺が元の世界に戻る方法。先に教えてもらお
うか？本当にお前しか方法を知らないんだろうな」

「恐らくね。方法は簡単だよ。もう一度姿見を使えばいい」

「確証はあんだろうな？その姿見は今持ってるのか」

「確証はないが自信はある。姿見はない」

変わらぬ笑顔で言い切った。

「……どこにあるかわかってる、よな？」

「知らない」

「オイイイイ！おまつ、バカですかア！？それで自信満々に『依頼達成したら元の世界に帰してやる』とか言ってたの！？それ以外に方法は！？」

「知らない。恐らくないだろうがね」

ニヤニヤ。

「てめつ、笑ってんじゃねエエエ！どうすんだよお前コレ、まさかそれを探せとか言うんじゃねえだろうな！」

「なんだ探さないのかい？探さなければ君はずっと帰れないのだよ？」

思わず拳骨を見舞おうと拳を振り上げる銀時を一護が慌てて取り押さえる。

「銀さん落ち着けて！気持ちは分かるけど、それは流石に絵面的に不味いつて！」

一護に宥められ、口元を引きつらせながらも努めて穏やかな声で質問を重ねる。

「もう一つ重要な事、向こうの俺はどうなってる？身体もここに連れてきたのか？」

これは本当に重要だ。

戻る戻らない云々の前に、戻ろうとしている銀時の身体がミイラになっていた、もしくは既に土の中、なんて目もあてられない。

「その点については安心していいよ。君を身体から出すために義魂丸を使ったからね。アレが君の代わりとしてあちらの世界で生活していることだろう」

その言葉に反応したのは一護だった。

強張らせた顔をルキアに向け、きよんとするアーモンドの目に眉間の皺を増やし溜め息を吐く。

銀時は理解できないながらもその雰囲気不安を覚えた。

「な、何なんだ？そのギコンガンってのは…」

「正確には“ソウル*キャンディ”だ。以前はその名だったが女性死神協会から――」

それはいいから、と一護が得意気に話すルキアを制す。

「簡単に言つと造られた魂のことで、少し違うけど、そのコンと同じようなもんだ」

ハチの代わりに説明した一護の指差す方を見ると、再び勲にじゃれつかれ遊ばれているぬいぐるみの姿が。

そろそろ悲鳴が消えかかっているコンをおもむろに掴んだ一護は、自然な動作でコンの口に手をつ込み、糸引く唾液(?)とともに硝子玉のようなものを取り出す。

「本体はコレな。まあ全部コンみたいな性格してるわけじゃないけど………、まあ銀さんの代わりに食事とかもしてくれるから身体のほうは、心配ない、と思う、ぜ？」

顔を逸らしながら言うことじゃない。頼むから目を合わせよう。

「……………。それで、向こうに戻れた時は？」

「君が身体に入れば外に出て、自然に消滅する。僕の特別製だよ」

「お前産、だと…！？……問題、ないんだろうな」

「あるわけがないだろう？僕を誰だと思っているんだ」

即答だ。

そつだ問題ない、ナイ、ナイナイナイナイ！

確実に沸き上がる不安から目を背け、銀時は次の質問をすべく思考に没頭した。

つまり、要約すると。

その姿見は世界に二つとないとしてつもなく高価で珍しい一品だそう
で、ハチはそれがどうしても欲しいらしい。

珍品コレクターのどうしようもない性だというが、真偽や如何に。
しかし肝心の姿見はどこにあるか、いや、あるかどうかさえ分から
ない。

それはこの自称怪盗が銀時を喚びだした直後、姿見が流れ星よろし
くどこかへ飛んでいつてしまったからである。ドラ○ンボールじゃ
あるまいが似たようなものか。

斯くして、姿見が欲しいハチと姿見がなければ帰れない銀時は、依
頼主と用心棒という関係で行動を共にすることに相成ったと言うわ
けだ。

「……どういうわけで？つーかちつとも要約されてないんだけど。
つーか要約されるべき話をされてないんだけど」

「だから言っただろう？僕は珍品コレクター兼怪盗で、ある組織か
ら姿見を……」

「だあから信じられるかアアア！嘘くせーにも程があんだよ！ル
○ンだってまだ現実的だよ！？いや大して変わんねーけど！つーか
お前の存在が嘘臭い！ったく、馬鹿らしすぎてやってらんねえっつ
ーの」

グチグチいいながらハチの前方を歩く銀時はそろそろ日も暮れて紺

と橙のグラデーションも美しい空を仰ぎ、穏やかなその風景とは裏腹な荒廃する気分のまま舌打ちする。

「その割りには随分と付き合いがいいじゃないか。半日も姿見探しに歩き回っていて、文句は多いが足は止めない。むしろ積極的に情報収集さえしている。君は所謂ツンデレなのかい？」

「ツンデレじゃねえ、ダルデレだ。いや、キョンデレか？いいから黙って探してるクソガキ。お前の為とかじゃねえ、姿見がなきゃ困るのは俺だからな。それに俺が見つければお前に恩売れるだろうが」

「それを本人を前にして言うのかい？言うておくけど僕はその程度で恩を感じるほど可愛くはないよ。むしろ他人の手柄を横取りして悦ぶタイプなのだがね」

「だろうよ。ったく、それにしたって場所の目星ぐらいつけとけっつーんだよ。どっか飛んでたつてんならその方向を探しやいいじやねーか。その組織つてのがあるウェコードームだかコンドームだかに行った方が早いだろ。なんで駄目なんだよ」

「避妊具ではない、^{ウェコードーム}虚圏だよ」

軽口を叩きながら黒崎家への帰路を辿る。

一護とルキアは家にいるだろう。

姿見搜索を手伝うと申し出てくれたのだが、自分の受けた依頼だからと遠慮しておいた。いろいろ世話になりすぎているという自覚はあるからだ。

しかしそれも今となっては後悔するばかりである。

とにかく早く姿見を見つけない銀時は、昼頃八ちに聞いた場所について口にするが、これに八ちは珍しくも嫌そうに笑った（それでも笑顔は崩さないのか）。

「……駄目な訳ではないが気が進まない。できれば最後に回したいところなのだよ。あそこは虚やそれ以上の化物がうろついている。それでも行きたいかい？」

「知るかよ、んなもん。ないところ探すよかマシだ」

今朝、一護の部屋で大体の説明をしたあと、不安だけを募らせた銀時はすぐにでも姿見を探しに行きたいという八ちに二つ返事で付いていった。

ハチ特製の義魂丸は、ハチが考えた最高の人格で造られている。それを聞いて蒼くなるのは銀時ばかりではなかったが、ともあれ向こうに帰るのに一秒すら惜しくなった銀時の苛つきは増すばかりで、もう帰れるのなら虚の巣窟に単身乗り込んで行くぐらいの勢いだ。

「仕方ないな。それなら少し準備が必要になるから、今日はそれに付き合ってもらふよ。それに君、卍解はできないのだよね？」

「卍解、って一護が前にやってたやつか？確か刀が黒くなって」

少し前に一度、黒崎家の近くに現れた虚を退治する一護が、数の多さに一気に片を付けるために卍解するところを銀時は見たことがあ

った。

斬月が黒く細身になり、そうなった後の一護の動きは銀時の目に追えるものではなくなった。

「卍解の形状や能力は人それぞれなのだよ。刀の形を保ったものもあれば、建物大にまでなる刀とは呼べないものまで様々だね。何にせよ、虚圏に行くのであれば卍解を覚えておくにこしたことはないよ」

あんな主人公みたいなのが自分にも漸くできるようになるのかと以前とても残念な必殺技しか教えてくれなかった洞爺湖仙人については心の奥底に埋め、今持つ白い相棒、白夜叉に大きく期待を膨らませる。

「でもそんな簡単に出来ちまうもんなのかよ、卍解ってのは」

「無理だろうね。一朝一夕じゃまず不可能だよ。しかし万が一修得できれば好都合、出来なくても修行した分はいい経験値になる」

「ふーん…修行ねえ」

どうやら本格的に主人公として働かなくてはならなくなってきたらしい。

努力なんてガラではないのだが。

「時間はない、すぐにでも始めるとしよう」

「ぎゃああああー!!」

『おまつ、やる気あんのかア!?逃げ回ってんじゃねえよこのマダオ(まるで墮落しちゃった俺)!!』

「うるせエ殺す気がテメエ!つーか俺ってこんな元氣百倍だったっけ!?こんなやんちゃ坊主だったっけエエエ!?」

『お前こそどうやってそんなマダオになれんだよ!俺もう未来が見えないよ、テメエのせいでお先真っ暗だよ!今からでも遅くねえ、俺がその弛みきった目エかっぴらかせてやらアアア!』

「うおわっ!もう嫌だなんで自分に殺されかけなきゃなんねえんだよ!あだっ、イテエなチクショウ!クッソもう主人公なんて辞めてやるウウウウ!」

銀髪白装束に追い掛け回される銀髪黒装束。

前者は実体化した白夜叉(数歳下の銀時)、後者は言わずもがな。一向に終わりそうにない追い駆けっこに、流石のハチの笑顔も不穩

なものになってきている。

大の大人が走り回れるこの場所は、ご存知浦原商店地下の修行部屋だ。

一護に話したところ紹介されたのがこの場所だったのだ。

ハチは修行に打ってつけの場所があると言ったのだが、その笑顔に嫌な予感を感じなかった銀時は迷う事なく一護の案を選んだ。

やけに残念そうな顔をしたハチを見て自分の第六感に感謝したことは余談として。

「…坂田、いい加減真面目に取り組んでくれないかい？これでは修行の意味がないだろう」

「銀さん真面目どころか必死だよコレ！ちょっと気イ抜いたら殺されるからね俺に！」

段々本気の殺意が籠もってきた白夜叉の斬撃を死に物狂いで避けては逃げ回る。

卍解を修得するにあたって、まず白夜叉を実体化させることについては、銀時は実にあっさりとやってのけた。

しかし、白夜叉からの試練、“自分自身に勝て”ということにおいては、以上の有様である。

それというのも、本来の過去の銀時であるなら身体能力にこれほどの差はつかなかったのだが、この白夜叉は死神の力というのか、いやに剛腕で頑丈で俊敏、つまりゲームでいうチート仕様なのだ。

修行開始早々意気揚々と白夜叉に特攻を仕掛けた勇ましい男はどこへやら、今は涙目のおっさんが縦横無尽に逃走するばかりである。

『避けんのばつか上手くなってどうすんだつつてんだよ！あくまでお前自身なんだから頑張りや勝てんだろーが！』

「馬鹿いうな、どんだけブランクあると思ってんだ！お前は全盛期の銀さんだから最強なんだよ！だって俺強かったしい！銀さん無双だったしい！」

『っだああうざってえ！もう修行とかどーでもいいよ死んでくんねーかなコイツ！っーか死ぬエエエエ！』

喧しいだけの二人（実質一人）を見守るのは、コーチ役のハチとこの場所を貸してくれた胡散臭い下駄帽子こと浦原、ここを紹介した一護、そして以前一護の修行に携わった黒猫姿の夜一だ。
夜一は未だ一言も喋らず、小高い岩場に乗り銀時等を静かに眺めていた。

正確にはハチ一人を。
ハチもそれに気付いているのかいないのか、まるで気にした風もなく夜一には一瞥もくれない。

「…おい、こんなんで大丈夫なのかよ。俺の修行の時はもうちょつとシリ阿斯で必死だっただろ」

「まあいいんじゃないっすかあ？坂田サン剣技は随分達者なようですし、あとは瞬歩なりできるようになれば始解だけでもそれなりに戦えると思いますよ？」

「っーかも瞬歩なんてとっくにできてるだろ、アレ…」

最早銀時の姿を追うのが大変になってきている一護は驚きを通り越し呆れている。何でも有りだなあの人。

初めは速すぎる白夜叉の動きに戸惑っていた銀時も、徐々に慣れ、半刻も経てば均衡するまでに至った。

それだけではなく、ただ避けるのに限界を感じた銀時は、斬魄刀の能力で空間を斬っては予想外の位置へ移動するという荒技を繰り返して、その位置もある程度コントロールできるようにまでなっている。あの瞬間移動擬きは瞬歩よりも厄介そうだと一護は苦笑した。

と、視線の先で全身真っ白の男がピタリと止まった。

逃げるのに必死だった銀時もそれに気付き、警戒しつつ動きを止める。

急に静まり返った空間がピンと張り詰め、俯く白い男から異様な殺気が立ちあがる。

「……………おい、」

「分かった。このままじゃキリがねえ、これで仕舞えにしてやる。これを受けきったら合格にしてやるよ。……………出来るもんならな」

途端膨れ上がる霊圧に圧されつつも逸らすことなく前を見据えると、白夜叉の持つ、銀時の血を吸って薄く桜色に染まった刀の刀身から、血色の靄もやが滲み出ている。

靄は霧散することなく白に戻った刀身に蛇のように絡み付き、縁起がいいはずの赤白のコントラストが不気味に揺らめく。

「この刀は空間が斬れるだけじゃねえ、やろつとすりゃあこの星だつて真つ二つに出来るんだぜ？人間なら、もっと簡単なんだよ」

白夜叉の目は本気だった。

銀時は腹を決めたのか、両足で地を踏み締め、正面から受け止める姿勢を作る。

その様子に満足したように鼻をならすと、白夜叉は刀を両手に握りしめて一歩軽く踏み出し、一気に加速する。

「死なねえ程度には手加減してやるよ！」

間合いまで距離を縮めた白夜叉が跳躍し、頭上に振り上げた刀を全体重を乗せ銀時の頭目がけて振り下ろす。

「らアアアツ！死ねエエエエ！」

「殺す気満々じゃねえかテメエエエエ！」

相対する獣の目は楽しそうに歪み、夜叉は刀を打ち合わせた。
一瞬の交差、背を向け合う二人は――両者倒れることはなかった。

「――っ、はああ……」

白い刀身が地に落ちる乾いた金属音がだっ広い部屋に響き、軽く目を見張る白夜叉を尻目に銀時は深く溜め息を吐くと、尻餅を付くように座り込んだ。

暫し惚けていた白夜叉は、怒りに肩を震わせ銀時に向き直る。

「……つてメエ、俺を倒せって言われたの分かんねえのかよ！もう終わったような面してんじゃねえよ！」

「あーあーもう分かったよたりーよめんどくせーよ。いいじゃねーか、俺ア勝てとは言われたが倒せとは言われてねーし？刀ア折れたんだからもう勝負は着いた。はい俺の勝ちー」

すでに寸分のやる気も見られない腑抜けた声音に、折れ残った刃でふざけた頭を力チ割ってやろうとし、諦めたように構えを解いて舌打ちする。

本当に面倒臭くてこの捻くれ者が白夜叉を斬ろうとしなかったわけではないことくらい分かっている。

一応同一人物なのだ、その思考が読めてしまっただけはこの行き場のない悔しさも消えてしまっしかない。

若い自分への悔しさはどうしようもないが。

「……んで、何か掴めたのかよ」

「どーだかな。まあ、無駄ではなかったんじゃない？」

「そーかい。なら俺はもう用済みだな。疲れたし暫く寝てくらア」

外方を向いたまま二、三言話すと、白夜又はさっさと消えてしまった。

場所を移して浦原商店奥の居間。

銀時は疲れ切って円卓に突っ伏している。

対して一日中銀時と行動を共にしていた八ちは小さい体の割りにはそれほど疲れた風もなく、笑顔も変わらない。

「で、成果は挙げられたのかい？」

「おう。……多分な」

「曖昧だね。まあ後は実戦で見せてもらうとするよ。明日もやることはあるからね。では黒崎、夜も遅いし帰ろうか」

「あ、ああ。そうだな」

「お主、……人間ではないな。そして死神でも虚でもない……、何者だ？」

唐突に、今まで一度も口を開いていなかった黒猫——夜一が八ちを睨み据えながら老獠な声を低く落とし詰問した。

喋る猫を目の当たりにした衝撃に顔を形容しがたく歪める銀時は捨

て置いて、まるで動じた風もない八チはただ飄々と笑みを浮かべる。

「別に何者でもないよ僕は。確かに貴方のいうそのどれでもない、しかし特別何者かというものでもないのだよ。僕というものを呼び表すなら八チ、それで十分だろう。何も懸念することはない。もちろん敵か否かといわれれば否だよ。正直僕は君たち死神とこうして接触を持つつもりさえなかったのだからね。つまり一匹狼というわけだね。ああ済まない、君もいたね勲」

正座し淡々と話す八チは膝に前足を乗せアピールする勲に謝り、一度話を切ると隣で驚愕も冷め退屈そうに鼻をほじる銀時を見やる。

「敵にはならない。しかし、僕は死神も虚も嫌いなのだよ。坂田は僕自ら死神として喚び寄せてしまったのだから仕方がない。が、何度も言うが君たちとは一切接触するつもりはなかった。今回のことは僕と坂田だけの問題であり、やはりその範囲内で事を済ませるつもりでいたのでね」

単調な声も浮かぶ笑顔にも変化はないが、八チと目を合わせていた銀時は一瞬、嫌いだと言ったその目に映った怒り憎しみ、ごちゃ混ぜになった人間らしい感情を見た。

「…八チといったか、お主、儂が死神だと判るのじゃな。霊圧は抑えていたつもりじゃったんじゃがのう」

「ああ、僕は貴方そのものだからね。でも僕には本質はわかっても今ある形しか映せないのだよ」

「……？何を、」

夜一が疑問を言い切る前に立ち上がると、ハチはそのまま銀時と一護に帰ろうと告げ、勲を連れスタスタと部屋を出て行ってしまった。残った者に今の言葉が理解できた者などいないか、と視線を上げた夜一の目に考え込むような喜助の姿が映った。

しかしそれも一瞬のことと、さっと立ち上がった喜助は置いてかれちゃいますよー？とクエスチョンマークをとばす銀時と一護を促し、二人を見送るのだろう、共に部屋から出ていく。

それを見届けた夜一は、これからまた一波乱ありそうだと、鬱々と溜め息を吐いた。

更新だいが遅れてしまい大変申し訳ないです。

今回の話は修行後の会話などで詰まってしまい、ほとんど書いていたというのに更新一月過ぎてしまっで…。

しかし終わりが酷いですね！次の話を書く前に出来れば全話分少し直しておきたいです。

話を考えるときこのあたりが一番矛盾に気を付けなければならないところなのかもしれません。

長編小説を書くのは初めてなのでまだまだこれからが分かりませんが。

ネタを思いついて即書き始めたもので、ラストは考えてはあるのですが探り探りです。

あまり考えずに書いていると会話が多くなってしまうのも悪い癖です…。

とりま今回は一丁前に伏線（になっているかどうかは別として）を張ってみたのですが、読み手さんには何を言いたいのかわからないと言われてしまいそうな自分でもちんぷんかんぷんな内容になってしまい…、正直手が付けられなくげふんげふん。

もう月刊連載みたいになってますが、最後までお付き合いお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5541h/>

銀ぶり

2010年10月25日20時50分発行